

韓国人日本語学習者の漢字能力に関する一考察 － 韓国の日本語学部新入生を対象に －

A Study on Kanji Ability of Korean Japanese Learner: Based on Freshmen of Department of Japanese Language in Korea

梶原 雄

要 旨

本稿では、韓国人が大学において日本語学習を始めるにあたり、中等教育で既習の漢字知識を基に、漢字由来の韓国語を漢字として認識できるかどうか、また、それを足がかりとして日本語学習に活用できるかどうかについて調査を行い、その結果をもとに考察した。

調査では、日本語学習歴一年未満の韓国の日本語学部新入生を対象とし、テストA、テストBの2種類の漢字テストを実施した。テストAは、ハングル表記の設問に合う漢字を選択するもので、テストBは、その設問で使われる漢字と同一の漢字で構成される語を選ぶというものである。

その結果、テストAでは、選択肢に偏や旁等に設問の漢字と類似する部分がある場合は誤答が多く、漢字の意味を理解していないと思われる誤答が見られた。テストBでは、選択肢の語の意味は理解していたとしても、その選択肢内の個別の漢字を理解していない誤答が見られた。さらに、テストAとテストBの両結果を比較すると、学習期間が短いほど、テストBの点数が高く、かつ、テストAとテストBの点数差が大きかった。逆に、学習期間が長くなればなるほど、両テスト共に点数が上がり、かつ、点数差が見られなくなった。

以上の結果から、韓国人初級日本語学習者は、たとえ漢字由来の語であっても、そのハングル表記からは漢字を連想することは容易ではなく、中等教育での漢字の知識を、そのまま日本語学習に応用することは難しいことが明らかになった。

キーワード

日本語 韓国人日本語学習者 漢字能力 漢字語 同音異義語

1 はじめに

韓国は歴史的経緯により漢字文化圏の一つとみなされている。その根拠の一つとして、韓国語¹の語彙の約8割が漢字由来の漢字語²であることが挙げられる。しかし、

1948年に「ハングル専用法」が制定されて以降、漢字語のほとんどがハングル表記へと変更されたことに伴い、日常生活での漢字使用が減少し、特に1970年代以降の学校教育を受けた所謂「ハングル世代」は漢字使用が限られ、現代の若者の間でも漢字離れが深刻化していると言われている。

一方で、韓国の学校教育において漢字教育が全く行われなくなったという訳ではない。1972年に当時の文教部³が、漢文教育用の基礎漢字として1800字⁴を制定しており、漢字数で比べると、日本の常用漢字数⁵に遜色ない数である。また、2014年には日中韓賢人会議において、808字からなる「日中韓共同常用漢字表」が発表され、日中韓3か国の中で日常的に漢字を使わない韓国では、特に関心を集めているようである⁶。

日本語教育の立場から見れば、漢字学習は個々の学習者の自主的学習に委ねられる部分が大きく、かつ、字形や音、意味の3つを総合的に学習しなければならず、日本語学習者にとって負担が大きいと言える。韓国人日本語学習者（以下、韓国人学習者）の場合、中等教育で学習したとされる漢字の既有知識を日本語の漢字学習に生かすことができれば、日本語学習の負担軽減が図れる。ただし、韓国人学習者が母語である韓国語の漢字の知識を日本語の漢字学習に生かすためには、漢字語の元となる漢字について理解しておく必要がある。

そのため本稿では、韓国人学習者、その中でも、中等教育を終えたばかりの日本語学部新入生を対象に、韓国語の漢字語について、その由来となる漢字を把握しているかを調査し、日本語学習への応用の可能性について論じるものである。

2 先行研究

これまで、日本語学習者の漢字習得に関する研究は、漢字圏、非漢字圏にかかわらず多数行われてきた。前述のように、従来韓国人日本語学習者は、漢字文化圏に属し、かつ、漢字学習の経験があるため、漢字習得に関して特に問題がないとされてきたが、漢字離れが進んだ現在、韓国人日本語学習者においても、非漢字圏の学習者同様に漢字の習得は容易ではないことが指摘されている。韓国人の漢字能力の実態に関する研究に関して、朴（2001：308）は、1999年と2000年に専門大学（短大に相当）に入学した新入生708名に対して行った漢字筆記能力調査において、漢字で書けた正答率は、両親の名前31%、学校名27%、専攻学科名17%、国名（大韓民国）25%、自宅の住所5%となったという結果を示している。

続いて、日本語と韓国語の漢字能力の関係について、李（2009：491）は、日本語の漢字学習に対するピリーフや漢字学習ストラテジーに関して、日本語の漢字を勉強する際に、その漢字の韓国語の発音を知ることが役立つかどうかを問う質問を行い、「役に立つ」と答えた学習者が7割を超えていた。このことから、韓国人日本語学習者は漢字を勉強する際に母語である韓国語に依存している可能性があることが推察できると述べている。一方、鄭（2010：3）では、日本語学習開始時の時点で読める漢字の数

は母語でさえ非常に少なく、日本語レベルが上がるにつれ、その日本語レベルで要求する漢字力に合わせて母語の漢字能力も向上していると述べている。

以上、韓国人の漢字能力、及び、日本語と韓国語の漢字能力の関係性について言及した研究を挙げたが、これまで日本語学習において韓国人学習者の漢字の既有知識の有益性について述べた研究はなされてきたが、実際に韓国人が初めて日本語学習を始める際に、どの程度漢字の既有知識を持ち合わせているか、また、その漢字の知識を日本語学習にどのように生かせるかという研究は少ない。そのため、本稿では、これから日本語を学ぼうとする日本語学科の新入生を対象に、ハングル表記を漢字として認識できるか、また、漢字語の中の漢字とその同音異義の漢字を適切に選択できるかどうかについて調査し、その結果を考察する。

3 研究方法

3.1 調査対象および調査時期

被験者は釜山市内にある4年制P大学の日本語学部⁷新入生31名で、国籍は全員韓国である。また、入学前の日本語学習歴は1年未満に限定した。調査は韓国の新学期に合わせて2015年3月中旬に実施した。

3.2 調査方法

本稿では大学入学時における韓国人学習者の漢字能力を測るために、2種類の漢字能力テストを行った。問題例は以下の通りである。なお、テスト用紙には日本語訳は書かれていない。

< 問題例 >

・テストA

- (1) 온 가족이 다 함께 여행을 떠났다.
(家族皆が旅行に出発した。)

a. 加 b. 可 c. 家 d. 歌

・テストB

- (1') 온 가족이 다 함께 여행을 떠났다.
(家族皆が旅行に出発した。)

a. 가능하다 b. 다문화가정 c. 유명한 가수 d. 가입자
可能だ 多文化家庭 有名な歌手 加入者

まず、テストAは、設問にハングル表記された漢字語を示し、それに適当な漢字を選択するというものである。(1)では「가족(家族)」の「가」に該当する漢字を選択肢の中から選ぶというもので、正答は「c」である。次に、テストBでは、テストAと同じ設問を用い、ハングル表記された漢字語の中の指定された一字と同じ漢字を含んだ漢字語を選択するというものである。(1')では、「가족(家族)」の「가」に該当する「家」という漢字を含んだ正答を同音異義語で構成された選択肢から選ぶというもので、正答は「b」である。テストの問題数は各30問で、選択肢にも両テスト共に同じ漢字を用い、正答はテストAとテストBでは異なるように配置した。テスト実施にあたっては、特に制限時間は設けず、テストAが終わった学生にテストBを配布するという形式をとった。

今回のテストで採用した各設問の選択肢の漢字は、日本と韓国とでは語の使用頻度や漢字の難易度等によって基礎漢字に違いがあり、日本と韓国で使用されている漢字に共通性を持たせるために、「日中韓共同常用漢字表」を参考に筆者が作成した。「日中韓共同常用漢字表」に載せられている漢字は808字あるが、この808字の内訳としては、日本の場合、小学校で学習する教育漢字710文字と常用漢字98文字に該当する。一方、韓国の場合、中学での学習漢字801文字と高校での学習漢字7文字に該当する。

表1 設問と選択肢の漢字一覧表

問題番号	設問	選択肢	問題番号	設問	選択肢
1	家族	加 可 家 歌	16	反省	性 成 星 省
2	報告	告 故 苦 高	17	少女	小 少 所 消
3	工場	公 共 工 空	18	首都	手 授 水 首
4	課題	果 科 課 過	19	申告	信 新 申 身
5	技術	基 技 期 記	20	友情	友 憂 牛 雨
6	童話	動 同 東 童	21	石油	幼 有 油 由
7	有名	名 命 明 鳴	22	義務	依 意 義 議
8	業務	務 武 無 舞	23	割引	人 印 因 引
9	新聞	問 文 聞 門	24	現在	在 才 材 財
10	訪問	放 方 訪 防	25	全体	全 典 前 電
11	不足	不 否 父 部	26	家庭	定 庭 政 正
12	比較	備 悲 比 非	27	製品	弟 第 製 題
13	使用	事 使 史 謝	28	注文	主 住 注 酒
14	異常	商 常 想 相	29	禁止	地 止 知 紙
15	新鮮	先 善 選 鮮	30	華麗	化 和 華 貨

表1は、「日中韓共同常用漢字表」から今回の調査で用いる設問と選択肢の漢字を抜き出した一覧表である。漢字選択の条件は、①選択肢を4つ作るために、韓国語での同音の漢字が4つ以上あること、②日本語と韓国語で同じ字形のもの。旧字体で表記

されるものは採用しない⁸。③「現代国語使用頻度調査⁹」により使用頻度が比較的高い語であること、以上三点を設定し、設問及び選択肢の語を設定した。

4 結果

4.1 テスト A について

まず、テスト A の試験結果について述べる。図 1 はテスト A の得点分布を表したグラフである。最高点は 29 点、最低点は 1 点、平均点は 15 点であった。また、学習歴による平均点を見ると、「日本語学習歴なし」は 14.3 点、「3 か月未満」は 12.8 点、「3 か月以上 6 か月未満」は 16.3 点、「6 か月以上 1 年未満」は 21.0 点であった。

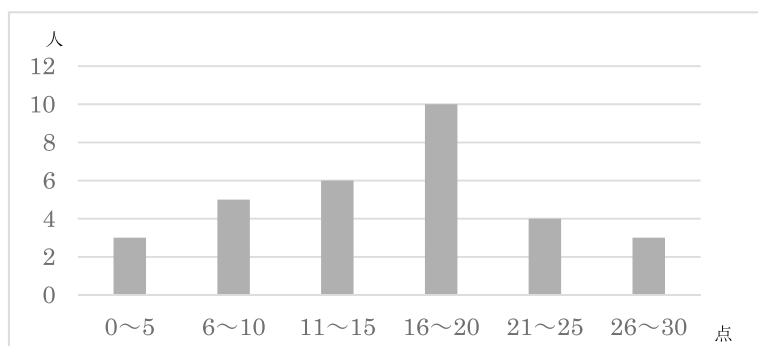


図 1 テスト A の得点分布

表 2 はテスト A で正答率が 30% 以下の問題を抽出したものである。正答率が 30% 以下の問題は (10)、(12)、(19)、(23)、(26)、(30) の計 6 問であった。誤答の多い問題について分析してみると、誤答全体にみられる特徴としては、(19)、(23)、(30) のように自分の知っている漢字を選ぼうとすることにより、より簡単で単純な漢字を選ぶ傾向にあった。他にも (10) のように、偏や旁に類似点がある場合は選択が難しく、(12) のように漢字の意味を理解していれば、選ぶ可能性が低いものを選択している場合もあった。

表 2 テスト A で正答率が 30% 以下の問題

(10)		(12)		(19)		(23)		(26)		(30)	
방문 (訪問)		비교 (比較)		신고 (申告)		할인 (割引)		가정 (家庭)		화려 (華麗)	
無回答	3	無回答	2	無回答	2	無回答	4	無回答	1	無回答	3
放	5	備	0	信	11	人	2	定	17	化	10
方	6	悲	8	新	11	印	5	庭	9	和	5
訪	9	比	9	申	7	因	11	政	2	華	8
防	8	非	12	身	0	引	9	正	2	貨	5
正答者数	9	正答者数	9	正答者数	7	正答者数	9	正答者数	9	正答者数	8
正答率	29%	正答率	29%	正答率	23%	正答率	29%	正答率	29%	正答率	26%

4.2 テスト B について

続いて、テスト B の結果について述べる。図 2 はテスト B の得点分布を表したグラフである。最高点は 26 点、最低点は 7 点、平均点は 18 点であった。また、学習歴による平均点を見ると、「日本語学習歴のなし」は 19.7 点、「3 か月未満」は 17.6 点、「3 か月以上 6 か月未満」は 20.4 点、「6 か月以上 1 年未満」は 21.6 点となった。

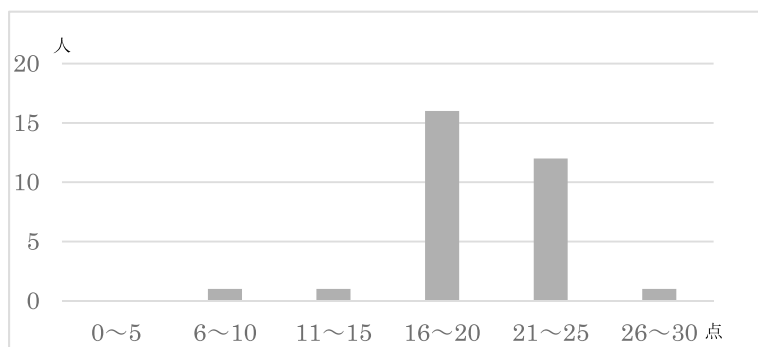


図 2 テスト B の得点分布

表 3 はテスト B で正答率が 30% 以下の問題を抽出したものである。正答率が 30% 以下の問題は (3)、(5)、(11)、(25) の計 4 問であった。各問題について分析してみると、(3) では、「공장 (工場)」と「공동기업 (共同企業)」のように、設問と選択肢の語に意味的関連性があるものを選択していた。このような傾向は、誤答の問題全体にみられる特徴であった。(11) に関しては、「부족 (不足)」の「부 (不)」を「거부 (拒否)」の「부 (否)」と間違える被験者が多かったことから、字形の類似性も誤答を誘発した可能性もある。続いて、(5)、(25) は意味的に設問と選択肢に関連性はないが、使用頻度や接触度合に関係があるのではないかと推測できる。

表 3 テスト B で正答率が 30% 以下の問題

(3) 공장(工場)		(5) 기술(技術)		(11) 부족(不足)		(25) 전체(全体)	
無回答	1	無回答	0	無回答	0	無回答	1
공기(空気)	2	기말(期末)	4	거부(拒否)	18	안전사고(安全)	3
기업(企業)	17	기억력(記憶力)	3	학부모(学父母)	1	전형적(典型的)	9
공부하다(工夫)	5	경기장(競技場)	8	대부분(大部分)	9	전제 조건(前提)	17
공원(公園)	6	기본(基本)	16	부동산(不動産)	3	전화 번호(電話)	1
正答者数	5	正答者数	8	正答者数	3	正答者数	3
正答率	16%	正答率	26%	正答率	10%	正答率	10%

5 テスト結果の比較と考察

前章において、テスト A とテスト B について個別に分析してきた。本章では、二つのテストの関連性について明らかにするために、テスト A とテスト B の各データを重

ね合わせて分析し、考察することにする。

まず、学習者と点数の関係について述べる。図3はテストAとテストBの得点分布を表したグラフである。テストAはすべての階級に数人ずつ分布しており、16～20点の範囲がもっとも多くなっている。一方で、テストBは、16～20点、21～25点に得点が集中している。このことから、漢字語のハングル表記から直接、漢字を選択しなければならないテストAの方が、同音異義語から適切な漢字語を選択するテストBに比べて、難しかったのではないかと推察できる。

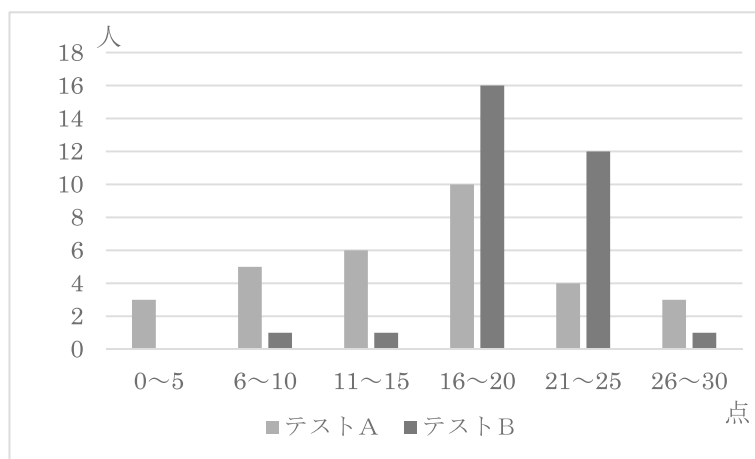


図3 テストAとテストBの得点分布

図4は、問題別正答者数を表したものである。横軸は問題番号、縦軸は正答者数を表し、各問題番号の左側のグラフがテストAの得点、右側のグラフがテストBの得点を示している。テストAとテストBにおいて正答率が低かった問題については、すでに前述のとおりであるが、両テストにおいて正答率が50%を下回ったものは、表で示したように(5)、(9)、(26)、(28)であった。設問はそれぞれ、「기술(技術)」「신문(新聞)」「가정(家庭)」「주문(注文)」と韓国語においても日本語においても使用頻度の高い語であったが、両テストにおいて誤答が目立った。また、表4の正答率50%以下の問題の選択肢別に回答者数を比較してみると、設問は同じであるにも関わらず、テストAとテストBでは誤答が多かった選択肢が一致していないことがわかる。一例として、(26)を見ると、テストAでは「가정(家庭)」の「정」に対応する漢字として回答者数が一番多い選択肢は「定」であったが、テストBでは、回答者数が一番多い選択肢は「정부(政府)」であった。このことから、韓国人学習者は使用頻度が高い語であっても、そのハングル表記を漢字由来の語であると認識することは難しく、また、設問の漢字と選択肢の語全体に意味的な類似性が無ければ正答を選ぶことができなかつたことから、漢字の多義性に気付けず、漢字と意味が一对一に対応していると考えられる被験者が多かつたものと思われる。

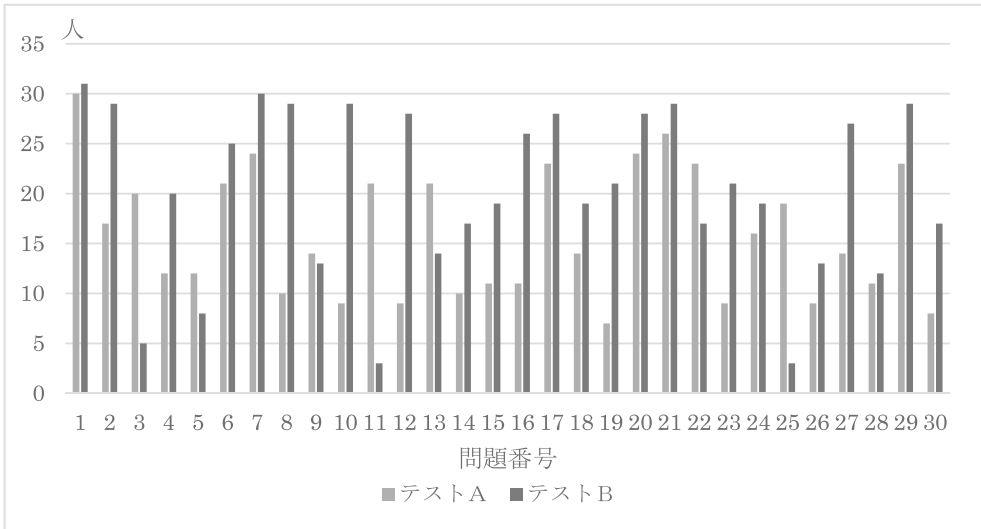


図4 問題別正答者数

表4 正答率50%以下の問題の回答者数の比較

(5)				(9)			
기술 (技術)				신문 (新聞)			
無回答	2	無回答	0	無回答	2	無回答	0
基	2	기말 (期末)	4	문	5	문제집 (問題集)	11
技	12	기억력 (記憶力)	3	문	9	전문가 (専門家)	1
期	4	경기장 (競技場)	8	문	14	문화재 (文化財)	6
記	11	기본 (基本)	16	문	1	청문회 (聴聞会)	13
正答者数	12	正答者数	8	正答者数	14	正答者数	13
正答率	39%	正答率	26%	正答率	45%	正答率	42%
(26)				(28)			
가정 (家庭)				주문 (注文)			
無回答	1	無回答	1	無回答	2	無回答	1
定	17	결정 (決定)	1	주	3	주인 (主人)	12
庭	9	정원 (庭園)	13	주	13	주택 (住宅)	5
政	2	정부 (政府)	15	주	11	주사 (注射)	12
正	2	정확 (正確)	1	주	2	음주 (飲酒)	1
正答者数	9	正答者数	13	正答者数	11	正答者数	12
正答率	29%	正答率	42%	正答率	35%	正答率	39%

続いて、テストAとテストBの問題毎の難易度を分析することにする。図5は、テストAとテストBの正答者数の比較を示したグラフである。横軸は問題番号を表し、縦軸は問題毎にテストAの正答者数をテストBの正答者数で引いた数値を表している。一般的に、漢字の字形や意味の知識が必要となるのでテストAの方が難しく、マイナス側に偏るのではないかと予想したが、(3)、(5)、(9)、(11)、(13)、(22)、(25)のように、テストAの正答者数の方が多い問題も見られた。特に、(11)では、「不」も「否」も字形と意味に類似性を持つものの、漢字表記では正確に区別できているが、テ

スト B では正答者数が非常に少ない結果となった。その理由として、被験者は、選択肢となっている「早동산（不動産）」には、「動産の対義語としての不動産」という反意語であることを知らなかったか、または、「早동산（不動産）」を「땅（土地）」という意味で、固有語と認識していたのではないかと推察できる。

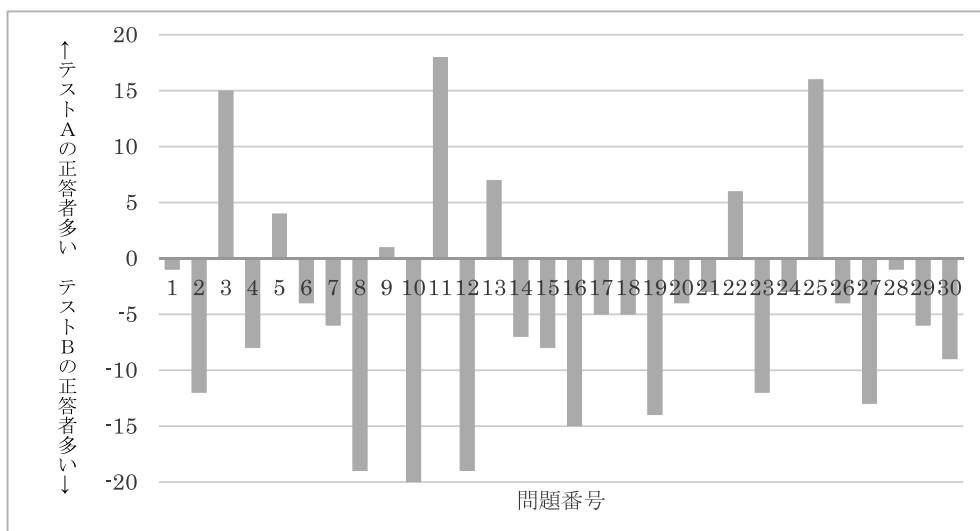


図5 テストAとテストBの正答者数の比較

最後に、被験者別にテストの結果を分析する。図6は、テストAとテストBの被験者別正答数の比較を表したグラフである。折れ線グラフはテストAとテストBを表し、棒グラフはテストAをテストBで引いた点数差を表している。また、学習期間については、被験者番号①～⑪は日本語学習歴がなく、被験者番号⑫～⑲までは三か月未満、被験者番号⑳～㉔は3か月以上6か月未満、被験者番号㉕～㉗は6か月以上1年未満である。

まず、テストAとテストBを被験者ごとに比較した折れ線グラフを見ると、被験者番号⑥、⑦、⑪、⑰、⑲、㉔、㉕は、テストAの方がテストBに比べて点数が高く、また、被験者番号⑰を除くと、総じてテストA・テストB共に高得点であることがわかる。このことから、漢字の字形や意味を理解することができれば、ハングル表記された漢字語の理解がより深まり、漢字の多義性に気づくことができると言える。

次に日本語学習歴で見ると、学習歴がないか短い学生ほどテストAとテストBに点数差があり、学習歴が6か月以上1年未満の被験者では、テストAとテストBの点数にほとんど違いが見られなかった。

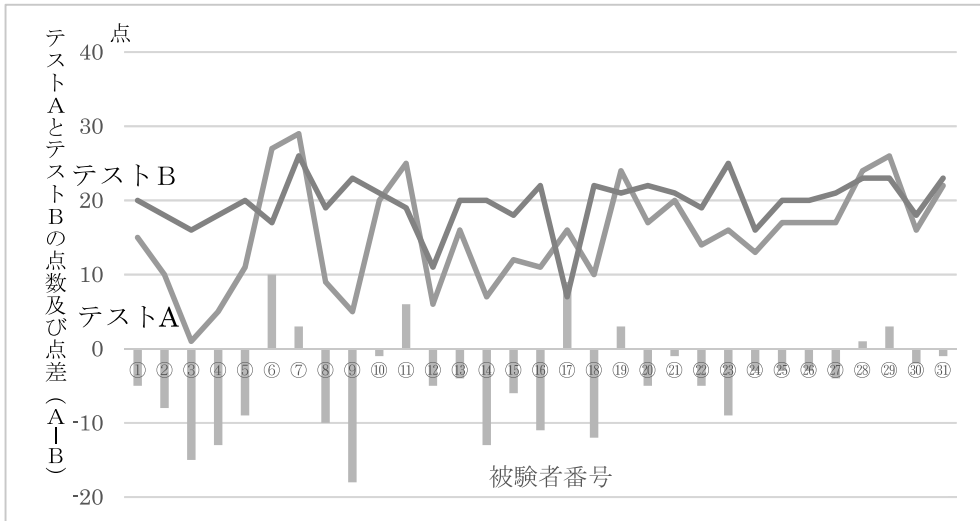


図6 テストAとテストBの被験者別正答数の比較

以上のことから、大学入学当初は、中等教育で学習した漢字知識を日本語学習に十分に生かせるとは言えないが、李（2009：491）や鄭（2010：3）で言及されているように、たとえ1年という短い学習期間内であっても、日本語レベルが上がるにつれて、その日本語レベルで要求する漢字力に合わせて母語の漢字能力も向上してくることが明らかになった。また、韓国人学習者が漢字語を漢字として認識できるようになることで、漢字の多義性と同音異義語の多様性にも気づくことができ、日本語学習においても語彙力の向上が図られるのではないかと考えられる。

6 まとめ

本稿では、韓国人学習者、その中でも、中等教育を終えたばかりの日本語学部新生を対象に、韓国語の漢字語について、その由来となる漢字の字形と意味を把握しているかどうかを二種類のテストを用いて調査し、その結果を基に日本語学習への応用可能性について論じた。本稿で明らかになったことは以下の三点である。

一つ目は、テストAの結果から、同音異義語の漢字の選択に際して、偏や旁に類似点がある場合は誤答が多く、漢字の意味を理解していれば選ぶ可能性が低いものを選択している場合があった。

二つ目は、テストBの結果から、ハングルで表記された語の意味は理解できても、その語中の個別の漢字の意味を理解していなかった。

三つ目は、テストAとテストBの両結果の比較から、学習期間が短いほど、テストBの方の点数が高く、かつ、テストAとテストBには点数差が顕著にみられ、学習期間が長くなればなるほど、テストA、テストBの両テストの点数が上がり、かつ点数差が現れなくなった。日本語と韓国語の漢字能力は相関関係があり、日本語学習者に

においては、日本語レベルが上がるにつれて、その日本語レベルで要求される漢字力に合わせて母語の漢字能力も向上してくることが明らかになった。

日本語学習への応用可能性については、現在、韓国では漢字離れが進んでおり、漢字と聞くだけでも拒否感を感じる学生がいるので、日常的に使用される語彙から漢字語であることを認識させ、漢字に対して拒否感を持たせないことが重要である。また、漢字を学習する際に、韓国の漢字語を効率よく利用するための学習ストラテジーの習得が必要であるが、特に初級段階においては、漢字の多義性と同音異義語の多様性に気づいていない学習者も多く、意味を基にして語彙を派生させることは難しい。そのため、漢字学習を学習者の自主性に委ねず、漢字学習のストラテジー確立のための指導が必要である。

今回の調査では、中等教育を終えた日本語学部新生を対象に調査を行い、日本語の漢字学習への影響及び効果について考察した。しかし、本稿においては、中等教育での実際の漢字学習の状況を考慮することができなかった。次回は、中等教育での漢字教育、及び大学での漢字教育の現状を踏まえ、漢字学習における連続性を視野に入れた研究を行いたい。

注

- 1 本稿では韓国人日本語学習者を対象としているため、韓国語という名称を使用する。
- 2 韓国語の語彙は大きく分けて3種類あり、古来からの朝鮮固有の単語である「固有語」、漢字の音を組み合わせた「漢字語」、諸外国語から借り入れた「外来語」がある。
- 3 現教育部
- 4 中学校で900字、高等学校で900字、合計1800字
- 5 1981年に告示された「常用漢字表」では1945字だったが、2010年に改定され、2136字となる。
- 6 学識経験者や元政治家らでつくる日中韓賢人会議の提言を経てまとめられた「日中韓共同常用漢字表」は、808字の漢字に精通していれば、日本語、中国語、韓国語ができなくても日中韓の三か国で簡単なコミュニケーションができるという趣旨で選定されたものである。現在、韓国内ではこの漢字表を元に書籍が販売されている。
- 7 実際の学部名は単に日本語学部ではないが、便宜上、日本語学部と表記する。
- 8 韓国では漢字を表記する際、旧字体を用いるが、日本の新字体とは別個の漢字であり、日本語教育では用いられないため、本テストより排除した。
- 9 韓国国立国語院より

参考文献

石井奈保美 (2003) 「漢字学習ストラテジーと日本語漢字学力 - 中級の学習者を中心に -」『日本語学研究』第8輯 pp.131-149 韓国日本語学会。

- 金仁炫 (2009) 「日本語漢字教育の指導法案」(日本語漢字教育の指導法案)『日本語教育研究』第16輯 pp.3-24 韓国日本語教育学会 .
- 権容璿 (2014) 『韓中日共用漢字 808 字』 ihanja.
- 趙南星 (2008) 「한국인 학습자를 위한 일본어 초급 교재의 한자 사용에 대하여」(韓国人学習者のための日本語初級教材の漢字使用について)『일본어연구』(日本語研究) 第24輯 pp.349-368 檀國大學校日本研究所 .
- 鄭聖美 (2010) 「韓国人日本語学習者の漢字能力について」『日本語教育方法研究会誌』17卷2号輯 pp.2-pp.3 日本語教育方法研究会 .
- 朴慶淑 (2001) 「대학생 漢字能力 實態와 한자교육의 必要性」(大学生の漢字能力の實態と漢字教育の必要性)『語文研究』29卷3号 pp.303-324 韓國語文教育研究會 .
- 李善姬 (2009) 「韓国人日本語学習者の漢字学習に対するポリシーとストラテジー」『日本學研究』第27輯 pp.485-pp.503 韓国日本学会 .